

前田妙子著

中世文芸の理念

桜
楓
社

中世文芸の理念

昭和四十九年四月五日
昭和四十九年四月十日

初版印刷
初版発行

定価 一、八〇〇円

著者 前田 妙子
発行者 及川 篤二
印刷所 (有) 共信社

101 東京都千代田区猿樂町二―二―六

(株) 桜 楓 社

(電話) (〇三) 二九一―五六六一
(振替) 東京 一八〇二〇

△検印廃止▽

序

日本文芸における中世文芸は、中古文芸の展開の相にみられ、それは近世文芸へと展開したものであるが、それ自体特質を持っている。感性を重んじ主情主義の中に形成された中古文芸は人間の「あはれ」と「みやび」とを中心としているが、中世文芸においては「あはれ」は幽玄と艶と結合し、その基盤において無常思想の影響を受けて中世的な美的世界を形成している。中世後期においては、謡曲や連歌の中にその本質がみられ、幽玄美と「さび」の美が特色づけられる。謡曲においては幽玄美と無常美とが綜合されて独特な中世美の世界を形成し、心敬以後においては「冷えさび」の世界が深くその文芸性を形成するに至り、中世文芸の深さと縹渺さを内包するに至った。日本文芸史の流れを辿ってみると、中世文芸は新古今を中心とする美的世界と、謡曲や正徹・心敬などによって形成され幽玄美の世界とが特色を以て見られる。それだけに中世文芸の世界を説明することは容易な業ではない。外面的な作品世界を解説することはさほど困難ではないが、その美的世界の本質を探り、その中を流れている文芸理念を説明することは、日本文芸学の理論主義の一側面であり中世文芸の本質的研究で極めて困難な作業である。中世文芸は上古文芸や中古文芸と比較してその基盤が深いようである。

この深い基盤を内包する中世文芸の理念を見事に解明した研究が前田妙子博士の本書である。まことに鋭い直観力と深い考察の中に、しかも豊かな芸術的情感を湛えながら中世文芸の理念を解明したところは前田博士の高

い文芸学の成果である。中世文芸は無常美の表現であると通説の如く言われているが、この無常美を謡曲文芸の構成と表現の中で、しかもこれに能楽論の「冷え」の美意識を照射しながら説明して行くあたりは、中世文芸の解明を水準以上に高くしたものである。能における狂乱の美を論じたものなどは学問的に高い興味が感じられるものである。また著者は中世文芸の理念の一つを「冷えさび」に認め、「冷え」の理念を解明するためにその展開を探り、歌論における長高体を原点としそこから展開して行く美的理念を、俊成の幽玄、竹体の世界、長明、心敬の幽玄と「冷え」の中に深く考察し、その歴史的展開を通して「冷え」の美的本質を規定した方法と内容は、文芸学における歴史と理論の見事な総合の結果である。これに歌合の美的表現を考察し、この側面からも中世文芸の理念を解明しているものである。著者は十七年前に和歌十体論に関する極めてすぐれた研究を出版し、それによって学位を得たのであるが、それ以来、文芸理念に関する研究を続け、今般この「中世文芸の理念」の一書を出版するに至った。中世文芸に関する著者の本質研究は次第に円熟の域に接近しつつあるとき、これを基盤として中世文芸の美的世界の究明を成し遂げられることを著者に要望したい。それは既に学問的立場を確立しているので、中世文芸の抒情と叙事の世界をあざやかに解明される日の近きを待望しながら、中世文芸の理念に関する極めてすぐれた研究の出版を心から喜びたいと思う。

昭和四十九年二月二十五日

實方 清

中世文芸の理念

目次

一 序説

中世文芸の理念——虚無への意志——……………九

二 無常美の表現

謡曲詞章における無常美(一)——その構成——……………三七

謡曲詞章における無常美(二)——その表現内容——……………四六

能楽論における「冷え」の美……………七〇

能における「狂乱」の美……………八〇

三 「冷え」の美的理念の展開

歌論における長高体の「きびしさ」と「冷え」……………一〇一

俊成に於ける幽玄の一方……………一〇六

歌論に於ける竹体の本質……………一二九

長明・心敬の幽玄と「冷え」……………一五五

「冷え」の美的本質……………	一七一
四 歌合の美的表現……………	
歌論に於ける「病」と美の関係……………	一八四
歌論に於ける秀逸体と「晴」の美的本質……………	二一六
五 結び——文芸学の方法……………	
日本文芸学の方法論……………	二二六
文芸学と文芸史の相関……………	二四七
日本文芸学の対象……………	二五七
本書に関係ある著者の論文目録……………	二六六
あとがき……………	二六七

一
序
説

中世文芸の理念

——虚無への意志——

一

社会的にも歴史的にも、また更に人間的にも深刻な苦難の体験を重ねた中世にあっては、文芸世界を形象する理念は一種の挫折感から発想し、虚無の絶叫へと流れている美的体験によるものと云える。勿論文芸形態^{ポエティック}によっても、また制作者の感じ方、考え方や欲し方など作者の個人的条件によって刻まれた特殊な理念が見出されるし、更に王朝によりかかった中世から、近古、近世に隣接する中世の時代的歴史的現実によっても多少の理念の質の相違はみられるが、一貫して美的統覚の全体性に対応する美的気分の特色は「虚無への意志」ということができる。私は中世文芸の表現内容及び表現形式の諸条件に現象している中世文芸理念の考察を行ないたいと思う。

方丈記、徒然草に流れるものは人間的活動から見ると、自己解体から自己確立へ、そして中世的終末感の自己放棄への現象をあらわし、同様に西行や俊成、定家、為兼等の美的体験は自己規制、自己解体から中世的自己解消の終末現象に吸い込まれていく。それらはそれぞれ客観的作品としては特殊でありながらすべて感性的にも精神的にも美的統覚としての理念の特色は「虚無への意志」と云える。いずれも生の讃歌ではなく、死に到達する内部にこめられた幻滅と敗北感の交錯する世界苦から発想した理念を表象している。人生体験、人間関係の挫折は中世文芸

の美的意識を創造し、反社会的、脱人間、現実喪失感は人間に内在する絶望的な情念の羽ばたきとなり、閉ざされたロマンチスト中世人達の心に巢喰うあやしげな陰翳の美を揺曳し、虚無への感性度は深まり、神秘幻影の形象設置へとかりたてられた。

二

世の中を思へばなべて散る花の　わか身をさてもいづちかもせむ

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは　身を捨ててこそ身をも助けめ

いざさらば盛り思ふも程もあらじ　薮姑射^{ハコヤ}が嶺の春にむつれて

これら西行の歌には「自己批判」があった。この自己批判は自然物に託して人間へ向けられた孤独のよるこびもしくは悲しみである。「盛り思ふも程もあらじ」という屈折をもった言い方は西行独特の自己規制の強さをあらわしている。くずれゆく貴族社会の安易な歌合サロンから疎外の立場で自分の真実に向って吐き出した感情なのだ。

心なき身にもあはれはしられけり　鳴たつ沢の秋の夕ぐれ

自己は「心なき身」にもかかわらずその自己を乗り越えてあふれ出る人間への郷愁は自己解体に自己自身をはこばせようとする。自己を放棄したはずの自己を確認し

さびしさに堪へたる人のまたもあれな　庵ならべむ冬の山里

と人間回避したはずの自己が思わず「庵ならべむ」と叫び、人間性そのものへの強い愛着の裏に自己は何故に愛着の境界を脱し切れぬのかという脱人間、脱自己を求める彼の中にひそむ寂寥の「痛み」がある。彼が平安末鎌倉

時代の時代感情や歴史感覚のない手であり、しかも武士であり僧侶である抒情歌人という人間主体の強さに支えられながら

見るも憂しいかにかすべき我心 かかる報いの罪やありける

と我が規制にむかって「いかにすべき」とわが心をもてあまし自己撞着と自己放棄の葛藤に嗟嘆するのである。彼の内省的自制は自己解体しつつある一種の脱落体験の感情である。生のむなしさ、人間への哀音が絶望の意識をひそめ「ねがわくは花の下」で春死にたいと生死の淋しさを凝視する。人間の「生」にもとづく行動の世界はいったい何であるのか、栄華の歓楽から一夢のうちに転落の途をたどった平家の幻影と同じ薄光を西行も俊成も対決した。

俊成はすすけた直衣を着て桐火桶によりかかりながらこの揺曳する幻影の美しき、崩落の淋しい光、「虚無への意志」を詩と感じた。

夕まぐれ霧たちわたる鳥辺山 そこはかとなく物ぞ悲しき

あれわたる秋の庭こそあはれなれ まして消えなむ露の夕暮

露や月影や涙につつまれた悲歌はまさに亡びゆく儚なさの美しきであり、斜陽する貴族の憂苦、不安の感情を心の中に沈め、その中に蔵する深さがほのぼのとした余情としてただよう。戦乱と陰謀の坩堝と貴族の栄華の中で彼が捉え得たものはこのような「寂」の光、幽玄暗裡の趣であった。鳥辺山は人間生命の終末を顕示する墓所、焼き場である。彼は時間的人生の集積をそこはかかない「鳥辺山」の夕まぐれの霧に託し、生命の存在そのものを「消えなむ露」と観じ、闘争と壊滅の歴史の中で王朝の残照をうけて冷えびえと内面に沈んでゆく複雑な人生苦、世界苦の昏迷を歌いあげたのである。

源平の戦の始まった頃十九才の定家は「世上の乱迷追討耳に満つと雖も之を注せず、紅旗征戎は吾事に非ず」と（明月記）書いて芸術至上主義の中にとじこもり、ひたすら美の観念内部に自己を置き、強い自我をもっていた。

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くやもしほの身もこがれつつ

幻よ夢ともいはじ世の中は かくてききみるはかなさぞこれ

忘れずば馴れし袖もやこほるらむ ねぬ夜の床の霧のさむしろ

定家の歌に刻まれている構築の拡がり、構想の襞ひだの中で何か「物語の女」の影が動いている。それは情熱の激しさというより、照明に浮び上ったような懸惑的な幻想によって誘発された魂の彷徨がある。幻覚の美、面影の揺曳である。寂しい崩れゆく王朝の足音でもある。栄華の残照を受けたデカダンスの詩情である。こうした妖艶の美の発想は俊成や西行の幽玄の趣とは異なるとしても、決して人間的官能や「生」の讃歌ではない。そこには尖鋭化した美の一瞬があるだけだ。自己の全存在をこの一刹那の美に凝集し、絶望感を妖しい哀愁に着色して、挫折の心的状況の世界を象徴的に表現したのである。「物のあはれ」の限界が非情の世界に投入した時、精神革命の文学として「虚無への意志」が根源的な主我の問題としてとりあげられたわけであらう。

三

こうした挫折感からくる敗北感「滅び」のモラルとなり中世全般をおおう無限的イデー、否定的イデーは「生」の深刻な悲痛とはかなき憂愁の哀音は琵琶法師の旋律する撥音はたきによって形象化されたのであらう。新古今集の光は平家物語の音である。

その音色は社会に失敗し、人間に対する幻滅を痛み、絶望の淵にたたずむ時、旧き世代を放棄すると共に新時代の若い、しかし荒々しい足音がいや応なしに迫って来る「盛者必衰」の鐘のひびきであり「おごれるもの」と「春の夜の夢」に契合する宇宙感的な脱落感である。そして又それは「さしも日本一洲に名をあげ威をふる」った人が「身はひとときの煙」となり、かばねは「むなしき土」となるべき盛者であり衰者であった。清盛は物語の途中で死亡しても、廃亡の感覚としての理念は全物語のすみずみにひろがっている。死への凝視は生の足跡を動的に描けば描く程、リアルな行為は永劫回帰の空しい徒勞として観じられる。ほこりと太陽のもとで汗と脂にまみれた戦場であったとしても萌黄おどしの鎧で黄覆輪の鞍に滋藤の弓を持った美装として眺められたのは貴族主義の敗北、崩れゆくものの美の形象である。「それよりしてこそ平家の子孫はながくたえにけれ」（六代被斬）と簡潔に言って流した全巻の終末には交響楽の終止に似た静謐が残る。或る時は一人当千の武士、或る時は離別の涙のあわ立ち、それらすべて影絵のように流れ去り、そこには人間不在感覚が残る。盛者は「平家都をおちはてぬ」「砂のまさごにたわぶれる屍」として「静止」の中に沈んで行った空しさである。客観的歴史的事実を観察したり、いかなる歴史の方向があるかを認識する物語ではなく、歴史の埒外に立って永遠の歴史感情、無限の宇宙感覚の中で「虚無への意志」が語られている。それは我々の生活感情の胸深くにある情念であり、硬化した一片の理論で裁断することへの否認であり、全き芸術によって形象する理念である。

「遂に彼人々は龍女が正覚の跡をおひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懷をとげけるとぞ聞えし」の宗教的終末によって序章の「無常の鐘」に呼応し、幻想的超越的形而上の世界「死の静謐」へ一切の人間が吸い込まれてゆく。「永劫と虚無」はそれは空間と時間を解消した世界であり我々の美的直観の対象になる。それが平家物語のすべてではなからうか。こゝに始めて「無常美」は美的理念となり得るのである。たとえば

「あけぬれば福原の内裏に火をかけて主上をはじめ奉て、人々みな御舟にめす：月の影、千草にすだく蟋蟀のきりぎりすすべて目に見え耳にふるゝ事：心をいたましめずといふ事なし：寿永二年七月廿五日平家都を落はてぬ」

は単なる「福原落」ではなく挫折と脱落感にくまどられた「虚無」の具象化である。人間の世界を否定し、人間と対立した世界ではなく「死への凝視」の文学である。平家物語は何を語ろうとしたのか。人生如何に生きるかというような浅薄な問いではない。それは生の方向破壊でしかない虚無への意識を歴史感覚によって形象したのである。無常を意識する人間と意識しない人間を物語に登場させることによって現実肯定を反省的にとらえ、新しい現実観察も実力行動も、そして旧秩序破壊の現実讃美もすべて無限の深みをもつ「虚無」への具体的条件として構想している。生滅、死、幽冥を意味する「無常美」の理念、それに属する恐怖や神秘からこの物語は投影され、音もなく色もない一切を否定した死の抽象を可能にする終末の巻によって幕をとじる。浪漫的な宗教の彼岸的体験を美的直観のイデーに流通させたのである。「死」について何を語らねばならなかったのか。現実否定、恋愛否定、人間性を否定した。それは貴族的にさめざめと泣くことではない。実相としてうけとめようとするとところに感傷をも否定する「虚無への意志」が理念化されている。実存の美を超越し、空無体験の「相」としてより大きな世界への容認がある。盛者必衰で幕をあげた物語は盛者たる者が「虚無への意志」によって衰者となることにより幕をとじるのである。この理念は「死」の中でしか息づき得ない美であり、反省された「存在そのもの」の淋しさである。敗北感や挫折感から発想し、否定的、破壊的、幻影的な頹廃美の美的統覚である。

このような歴史の泥中から咲き出た美——を歴史的な宇宙感覚としてうけとめるかわりに自己の内面のドラマとして自照したものが